

出演団体紹介文（英訳用）

0 1

本日、出演する垣澤社中（Kakizawa-Shachyu）の歴史について簡単に紹介します。

0 2

Kakizawa 家は、家族で神楽を継承してきた特別な家です。同時に普通の家です。夫婦と親子が会社に務めており、仲良く暮らしています。

0 3

Kakizawa 家の人達は、自分たちが継承してきた神楽の名称を相模里神楽（さがみさとかがら）と名付けています。

0 4

相模（sagami）とは、地方の名前。現在の神奈川県にほぼ相当します。

0 5

次に、里神楽とは、神楽という伝統芸能に、里（sato）という文字を加えています。

0 6

つまり「ローカルな神楽である」ことを表明しています。

0 7

相模里神楽は、相模地方に伝わる里の神楽という意味となります。

0 8

垣澤社中のリーダーの名前は、垣澤勉（かきざわつとむ）さんです。

0 9

彼と彼の奥さん（純子さん）と娘（みずき）、息子（りょう）の四名が垣澤家の家族です。

1 0

彼らは厚木市酒井という土地で暮らしています。

1 1

最近では、みずきさんの夫（たつや）さんも神楽の稽古をはじめています。

1 2

勉さんの父親の名前は常蔵（つねぞう）です。

1 3

常蔵の父親の名前は鹿造（しかぞう）です。

14

しかぞう、つねぞう、つとむの三人が、おおよそ100年間にわたって、神楽を継承してきました。

15

ただ、鹿造が、いきなり神楽を継承する垣澤家を創立したわけではありません。

16

鹿造は、現在の綾瀬市寺尾（あやせ city てらお）で活躍していた本間平太夫（ほんまへいだゆう）という方から神楽を学んだそうです。

17

本間家は、神楽を継承する有名な家でした。

18

本間家は、平太夫（へいだゆう）という名前を歴代、名乗ってきたのです。

19

神楽を継承する家々のなかでも、本間家は特別な家でした。

20

本間家は、神楽の世界で、トップリーダーでした。

21

また、本間家の人たちは、神楽を指導することが上手で、たくさんの弟子（でし）を養成しました。

22

鹿造は、本間平太夫（ほんまへいだゆう）から神楽を学びました。

23

やがて、鹿造は、笛の名手として知られるようになりました。

24

笛の名手でしたが、年齢が若い。そこで、“相模の小僧”（相模地域のヤングボーイ）と呼ばれていました。

25

「相模の小僧」は伝説的な存在として、相模（さがみ）はもとより、他の地域でも知られていました。

26

もう一つの話。垣澤家が暮らす厚木市酒井の近くに愛甲（あいこう）と呼ばれる土地がありました。

27

愛甲には萩原英之進（はぎわらえいのしん）という人がいました。

28

萩原家は、神事舞太夫（しんじまいだゆう）の家と呼ばれていました。

29

萩原家の人達は、神事舞と呼ばれる、舞を伝えてきました。

30

また、神事舞だけでなく、神楽も伝えていました。

31

萩原家では、愛甲神楽（あいこうかぐら）という名前で、愛甲近くの神社で神楽を演じていました。

32

今でも、愛甲神楽（あいこうかぐら）という言葉を私たちは聞くことができます。

33

おそらく、萩原家の神楽は、本間家と同じように、相模の人ならば誰もが知っていたと思われれます。

34

神楽を学んだ鹿造は、本間家と萩原家から養子になって欲しいと依頼されました。

35

しかし、残念なことに、垣澤家には男の子どもが一人しか、いませんでした。ですから、本間家と萩原家からの依頼を断りました。

36

鹿造は、相模に伝わる神楽を発展させるために、愛甲神楽を継承している萩原家の娘さんと結婚しました。

37

そして、鹿造は、萩原家の神楽、すなわち愛甲神楽の継承と発展を支えました。

38

おそらく、萩原家の人たちは、鹿造の人柄が素晴らしいことに加えて、神楽が上手であったこともあって、結婚を歓迎したのだと思います。

39

鹿造は、萩原家から娘を貰ったことにより、仕事に、そして神楽の稽古に打ち込んだと推察されます。

40

神楽芸をしっかりと学び終えた鹿造は、垣澤社中を創設しました。相模の神楽を担う家が誕生しました。

4 1

それは、明治四五年（一八七一）のことでした。

4 2

しばらくして、愛甲神楽を育てた萩原家が神楽継承を断念します。

4 3

相模で、多くの人々に親しまれてきた愛甲神楽が消えてしまう危機が訪れたのです。

4 4

そこで、愛甲神楽の芸と精神は垣澤家に引き継がれました。偉大な萩原家の愛甲神楽を鹿造は、守ったのです。

4 5 さらに、きびしい波が相模を襲いました。偉大な、本間平太夫（綾瀬市寺尾）がつくりあげた神楽も継承が困難となり、その神楽芸の核心は、垣澤家に引き継がれていきました。

4 6

垣澤家が伝える神楽は本間平太夫からの神楽芸と萩原英之進からの神楽芸が引き継がれています。

4 7

偉大な二つの家が作り上げた神楽と、その精神を引き継ぐことになった鹿造は、強い責任感を持って、息子、常蔵に神楽を教えました。

4 8

鹿造（父）から、常蔵（息子）へ世代交代をしながら垣澤家の神楽は、しっかりと相模地方で神楽の仕事を増やしていきました。そして、勉（孫）へと移りました。

4 9

神楽を継承している垣澤家ですが、神楽を演じることで、家族の生活が経済的に成り立つことはありません。

5 0

むしろ、神楽を継承することによる経済的負担は大きく、非常にきびしい状態にあります。家族が揃って働いて、神楽の継承のためにその収入の一部を負担しています。

5 1

垣澤家の家族は、一生懸命に働いています。その上で、神楽の稽古に時間を割いています。加えて、神楽を学びたい方々を募り、指導して、垣澤家が伝えてきた神楽を継承する人達を増やしています。

5 2

その理由は、相模の神楽を発展させる責務を垣澤家の家族が背負っているからです。

5 3

本間家、萩原家から神楽を預かっている、という責任があるからです。

5 4

特定の家依存して、里神楽は継承されています。特定の家が里神楽を維持することは、本当に大変なことです。神楽の継承は、この先も危うい状態が続くと思います。

5 5

しかしながら、垣澤家に暮らす家族は神楽をととても大事にしています。

5 6

神楽に対する特別な愛情抜きには神楽を継承はできない、ということも事実なのです。

5 7

垣澤家は、相模地方の神楽を継承しています。そこで、「継承」の具体的な内容について、少し詳しく紹介します。

5 8

①神楽で用いる衣装を継承しています。衣装をしっかりと保存しています。補修しています。常に、買い足しています。

5 9

②神楽で用いる面（神楽面と呼びます）を継承しています。補修しています。神楽面を塗り直しています。

6 0

③神楽で用いる採り物（とりもの）と呼ばれる小さな道具を継承しています。これは神聖な道具です。

つねに、補修しています。新しく制作しています。また、購入しています。

6 1

採り物というのは小さいものですが、非常に重要な道具です。

6 2

採り物がければ、神楽は成立しません。

6 3

神楽を舞う人たちが、採り物を持たないで、舞台上で演じることはあ

りません。

6 4

神楽鈴 (かぐらすず)、剣 (つるぎ)、扇子 (おおぎ)、弓矢 (ゆみや)、釣り竿 (つりざお)、笹 (ささ)、櫛 (さかき)、矛 (ほこ) などを探り物と呼びます。

6 5

採り物を持つ理由ですが、大きく二つあります。

6 6

神楽を演じる人たちは、採り物を用いて、神様を降臨させることができます。遠くにいる神様を採り物の力で、近くに呼び寄せると垣澤家の家族は考えています。

6 7

神楽を演じる人たちは、採り物を用いて、舞台を清めることができます。また、神楽を見ている人たちを清めることができます。また、神楽が演じられている地域を清めることができます。そのように垣澤家の人達は考えています。

6 8

④神楽は演劇的要素が強いので、舞台では大道具、小道具が必要です。

6 9

神楽用のたくさんの大道具、小道具を継承しています。大道具を保管しています。

7 0

また、新しく作っています。

7 1

数多くの小道具も保存されています。また、新しく作り直しています。

7 2

⑤神楽を演じる為に必要な楽器を継承しています。太鼓、笛などを継承しています。鹿造と常蔵がつくった王管 (おうかん) と呼ばれる笛や篠笛も継承しています。

7 3

笛の作り方も勉が継承しています。昔のことですが、笛は神楽を演じる人たちが自分で造りました。

7 4

また、新規に楽器を購入しています。

7 5

⑥垣澤家の人達は、楽器を演奏する技術をすべて継承しています。

7 6

楽器を演奏する技術を伝える指導法も継承しています。この技術のことを神楽芸（かぐらげい）といいます。

7 7

楽器を演奏する人たちのことを鳴り物師（なりものし）とか囃子方（はやしかた）、または、皮師（かわし）と呼びます。

7 8

⑨垣澤家の人たちは、神楽の演目をすべて詳細にわたって理解し、どのように舞台上で踊るのか、舞うのか、演じるのか、という技術を継承しています。

7 9

舞台上で演じる人達を舞い方（まいかた）と呼びます。この技術のこととも神楽芸（かぐらげい）と呼びます。

8 0

⑩垣澤家の人たちは、鳴り物と舞い方の二つの分野で神楽芸を継承し、発展させています。

8 1

⑪垣澤家の人達は、同じように、神楽芸を家族全体で支えている家と深い関係を持っています。

8 2

神楽を支える家同士が姻戚関係になっていることは珍しくありません。

8 3

神楽を演じる時、演じ手が足りない場合があります。しかし、どんなことがあっても、神社のお祭りで神楽を上演しないとはいけません。

8 4

そこで、垣澤家と同じように、神楽を家族で支えている家から、助けてもらって、演じ手を補充します。

8 5

神楽の演じ手不足を解決するために、神楽を支える家と家との協力関係が必要です。

8 6

⑫垣澤家は、近隣にある神社と深い関係を持っています。

87

神楽は神社の祭りで上演される芸能です。

88

神社に関係する人たちと神楽芸を維持してきた家との交流は大変長いのが特徴です。

89

神楽は、素晴らしい伝統芸能です。まずしかし、残念なことです、神楽を理解する人の数は、増えていません。むしろ減っています。

90

したがって、垣澤家の人達は、小学校や中学校を訪問して、神楽の素晴らしさを伝えています。

91

子どもたちに、伝統芸能の素晴らしさを伝えています。神楽と呼ばれる伝統芸能を子ども達に理解してもらおうと、垣澤家の人たちは、懸命に努力してい

92

神社のお祭りのなかで神楽を演じるのが基本ですが、垣澤家では、地域の様々な行事に参加して、神楽を演じています。

93

最近では、神社（神楽殿）で神楽を演じるよりも他の場所、他の理由で演じる機会の方が多いのです。

94

神社以外で演じられ機会が多くなりました。

95

そこで、神楽芸も昔通りの形式から、現代の人たちが理解できるように、改良していくことが求められています。

96

伝統芸能は、つねに新しい風を吸い込む必要があります。

97

垣澤社中は、相模地方の神楽という芸風（芸の様式）を大事にしなから、新しい芸風（芸のスタイル）も産み出しています。

98

相模地方の神楽の魅力を再評価して、昔の姿を放棄することなく、頑固に守っています。

99

人々は、新しい神楽を求めています。垣澤家で神楽を受け継ぐ人達

は、稽古を重ねながら、いろいろな機会に新しい神楽を公開しています。伝統芸能を守り、発展させるには、チャレンジする姿勢が必要だと思われます。

100

最後に、垣澤社中の人々は、地域のお祭りで、終日、神楽を演じています。

101

お祭りのときに、遠い世界から訪れる神々を喜ばせようと、神楽を演じています。

102

お祭りに参加する人々が楽しい気持ちになるように、神楽を演じています。

103

小さな地域社会にある小さな神社では、神楽を上演しても、神楽を見る人がほとんどいないこともあります。神楽の見物人がいないのです。

104

それでも、垣澤家の人たちは神楽を一生懸命に演じます。

105

神楽は見物人がいなくても成立する、不思議な芸能です。神様が見ている、という意識で演じ手は演じています。

106

垣澤社中の方々は、神楽という伝統芸能を祖先から預かっています。そして、祖先から預かった神楽を、現代、未来へと引き渡す仕事を担っています。

垣澤家の人達は、本間家から預かった神楽、萩原家から預かった神楽に垣澤家がつくりあげた神楽を混ぜて、演じています。

107

垣澤社中の皆さんが演じる神楽は、大きな過去を背負った神楽だと言えます。

108

しかし、大きな過去を継承するだけではいけません。新しい神楽を創造することが求められています。本日、公演にご来場して下さった皆さん、どうぞ、垣澤社中が演じる神楽に大きな声援を送ってください。